

就任にあたって



消防庁次長 高尾 和彦

このたび消防庁次長に就任した高尾和彦です。消防庁勤務は消防・救急課長、消防大学校長について3度目になります。身に余る重責ですが全力で職務に専心してまいり所存ですのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

発令が御嶽山の噴火の直後となり、就任早々、政府の非常災害対策本部の構成員として対応にあたることになりました。振り返ると、我が国ではこの1年あまりの間に、伊豆大島の土石流、2月の豪雪、広島市の土砂崩れ、相次ぐ台風の襲来、御嶽山噴火、そして長野県北部の地震と大規模な災害が次々に発生し、甚大な被害をもたらしました。忘れた頃どころか忘れる間もなくやってくる災害を目の当たりにして、改めて自然の猛威と人間の非力を感じさせられました。そして一国民として、今や日本では誰もが災害の被害者となりその犠牲となりうる、自らや家族の命を守るため日頃から想像力をたくましくしていざというときの行動につなげなければならない、と痛感しました。私自身も生まれて半年の時に伊勢湾台風に襲われ高潮や強風による危機を体験しました。親から当時のことをよく聞かされましたが、それまでの命だったとしても不思議ではありません。このたびの一連の災害で被害に遭われた方々の無念は察するに余りあります。心からご冥福とお見舞いを申し上げます。

このような状況に至り、消防防災関係者も改めて「常在戦場」ならぬ「常在『災』場」の心構えが求められています。管内の地理・気象、施設・建築物、住民や人口の動態などを再度確認し、起こり得る災害や事故を想定して、組織としての実践訓練はもちろん個人の日頃からのイメージトレーニングが重要になると考えます。私は、全国各地で勤務する中、数多くの災害を経験してきましたが、今回の広島市の災害に接して平成10年9月24日の高知豪雨を思い起こしました。夜間に時間雨量で129ミリ、午後9時から翌午前1時までの4時間で362ミリの雨が降り、河川の氾濫で高知市が文字通り水没してしまったのです。夜間の短時間に途方もない雨が降った点は広島とよく似ています。市役所は市民に避難勧告や指示を出せずじまいでした。県庁も災害対策本部を設置するのが遅れ、職員の参集もままなりません。翌朝、ヘリコプターから送られてきた映像は衝撃的でした。市街は、一面、茶色の泥水におおわれ、その中に浮かんだ屋根や車上で大勢の人が救助を待っていました。「水が引いたら遺体が累々と横たわっているのではないか・・・」その時の暗澹たる気持ちは今も忘れられません。高知市の死者は6名でしたがマンホールの蓋ははずれ、わからずに転落して亡くなられた方がいたのはショックでした。その後の検証では「想定外」という言葉がたびたび出てきたのですが、裏を返せば「想定力」が足りなかったということです。人間は、自分は大丈夫だろう、まさかそんなことは起きないだろう、という楽観思考、逃避心理に傾きがちですが、こと災害や事故に関してはそれを断ち切らねばなりません。このことは災害の経験と教訓を後世に伝えていくうえでの根幹だと思います。

一連の災害や日々の火災・救急事案などに対する緊急消防援助隊や各消防本部・消防団の懸命の活動には本当に頭が下がります。消防に対する国民の皆様の期待と信頼をさらに確固たるものとすべく努力してまいりますので、皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。